

## 吾輩の日常

済美高校 3年 いなり

吾輩は犬である。名前はまだな「ポチー！」否、ポチである。

だが吾輩はこの名前を気に入ってない。こんなセンスのない名前を付けたのはこの家で父と呼ばれている人物である。最初にこの名前を言われたとき、「嫌だ」と拒否したのに何故か、「お、そうかそうか、気に入ってくれたのか！」と行って真逆な思い違いをされた。父の娘である夢衣だけが吾輩の思いを正しく読み取ってくれて最後まで一緒に拒否してくれたが、父が「もう、決めた。反論は認めん！」とポチという名前を強引に押し切った。母は、にこやかに笑うだけで話し合いに参加すらしなかった。なんて薄情な母親だ。父は吾輩の気持ちを分かっていた気であるが、父の解釈は常に正反対である。

吾輩の生まれは、とあるペットショップだった。なかなか買ってもらえず、長い間ずっとガラスのケースに入って見世物にされていた。一緒にいた兄弟たちは次々と買われていき、気が付けば吾輩だけがポツンと最後まで残されていたのだ。一緒に残って励まし合っていた最後の弟も、自分が先に買われるとなったとき、吾輩の顔を見て勝ち誇ったように出ていった。あの顔を思い出すと今でも腹が立つてくる。このままではまずい、芸のひとつでも披露しなければいけないか、と焦りを覚え始めていた頃、夢衣がペットショップにやってきた。夢衣は父と二人で来ていた。吾輩はなんとしてでも買ってもらおうと、じつと夢衣達を見つめた。すると吾輩の思いが通じたのか、夢衣と目が合ったのだ。しばらく見つめあっていると

「私あの子がいい」

と夢衣が言い、吾輩を選んでくれた。そう、夢衣は、吾輩にとって救世主だった。夢衣に会う為に長い間見世物になっていたと思うと、あの長く辛い時間も無駄ではなかったとさえ思えてくる。こうして、無事吾輩はこの家に飼われることになり、とうとう二年目に突入した。じめつとした梅雨が終わり、夏がやってきた。ついにこの時季がやってきてしまった。奴が、奴がやってくるのだ。

あれは、まだ吾輩がこの家に来て間もない頃だった。夕食をもらい満足し、フカフカの絨毯

に寝そべりながらうとうととしていた時だ。

「キヤーツー！」

突然母が叫び出した。

何事だ、敵襲か！と思ひ直ぐに飛び起き、周りをきよろきよろと見回した。父は何かに気づくと慌ててあたりを見回し、丸い筒を手に持ち、そして、何やら壁のほうにそっと近づいた。当然吾輩も一緒になって後を追いかける。立ち止まった父の足の隙間から覗こうとしたとき、何やら強烈な臭いが吾輩を襲った。それは、父が手にしていた筒から勢いよく吹き出ているようだ。まさか父から攻撃されるとは。想像もしてなかった至近距離からの攻撃に吾輩はなんとか堪えていた。意識が朦朧としかけたそのとき、何かが吾輩の体にぶつかってきた。吾輩は、驚いて勢いよく飛び退く。今度は何事だ！と、ぶつかってきたものを見てみると、なんとも不気味な姿をしていた。毛がたくさん生えている足を苦しみに耐えるように必死に動かし、床を這いずり回っている。初めて見る物体に恐る恐る足を伸ばして突っこうとしたとき、奴は背中にあった羽をばさばさと動かして威嚇してきた。驚愕することの連続で吾輩は、こいつは危険だ！と、必死に吠えた。

すると、リビングの入り口で夢衣が

「うんやんこ」

と不機嫌そうに低い声で言った。夢衣は、吾輩たちを見て眉間にしわを寄せ、机の上にあった新聞紙を丸めた。そしてそのまま無言でやつをはたく。いきなりこのことで、吾輩は恐怖し尻尾を丸めた。呆然とする吾輩の横で無表情のまま夢衣は、奴を何枚か重ねた白い紙に包んで捨てた。

「さすが、夢衣ちゃん！私たちの子ね！」

張りつめた空気を打ち壊すように、呑気な母の声が響く。吾輩は、どこに母たちの血が入っているのかと否定したくなった。夢衣も同じ気持ちなのか母を冷めた目で見つめていた。しかし、どんなときも自分のペースで進んでいく母である。そんな視線をものともせず、すでに違う話をしていた。

案外二人は、似ているのかもしれない…。

後日、奴はゴキブリというのだと知った。もう、あんな体験はしたくないと思う。たまに、小っちゃい奴の子供らしきものも出てきたが、もう奴を見ても恐怖しか生まれぬ。奴が一匹いるだけで三十匹いるんだと聞いたときは、恐怖し震え上がった。初めの好奇心など当の昔に消えてなくなってしまうた。今年はもちろん去年のような体験はしたくない。出てこないのを祈るばかりである。ああ、恐ろしい。くわばら、くわばら。